

まほらに吹く風に乗って

<日本の美しい風景と歴史のプチディクショナリ>

地域に眠る埋もれた歴史シリーズ (14)

香取神宮とその周辺に行く



ふるさと“風”の会

まほらに吹く風に乗って
＜日本の美しい風景と歴史のプチディクショナリ＞

ふるさと風の文庫

地域に眠る埋もれた歴史シリーズ（14）
香取神宮とその周辺に行く

木村 進

ふるさと“風”の会

(1)香取神宮-入口から要石

下総国一宮の香取神宮を紹介します。

香取神宮は鹿島神宮とともに今の霞ヶ浦への侵入口の両側を守る要の神社です。この二つの神社に祀られている武甕槌（タケミカヅチ）、経津主（フツヌシ）は、日本最強の武人神と言われています。

このため、全国の剣道などの武術競技の人達のお参りも断たないところです。昔、霞ヶ浦が湖ではなく内海であった頃は、この2つの神社（神宮）がとても重要な意味を持っていたと思われます。

あまり有名になるとどのように紹介して良いかわかりません。

この神社を最初に訪れたのは7月中旬過ぎです。

香取神宮駐車場のところから神社鳥居の前までお店が続きます。

平日だったので車も少なく、お店からの呼び込みも少なめでした。



鳥居は津宮にあるのが一の鳥居で香取神宮へはこちらではなく奥宮の方とつながっています。

こちらの入口へはもう一つ佐原の町側に香取神宮入口の大きな鳥居があります。この鳥居の入口左手に木の立派な看板が立てられています。

「定

車・馬を乗入る事

魚・鳥を捕える事

竹・木を伐る事

右境内において禁ずる」

この先は昔からこの掟が守られてきた神宮の森です。

両脇の木々の茂る中を玉砂利のひかれた広い参道が本殿まで続きます。

この参道の途中左手に鳥居が見えてきました。「護国神社」および「要石」への道がここから別れます。ここから左の昇り道へ。



この道の少し入ったところに「要石道」の石柱がありました。

道はそのまま護国神社に入ります。護国神社の一の鳥居が見えてきます。本道の参道とは違いこちらは山道です。 7月も時期はもう遅いのになまだ紫陽花が咲いていました。

山道を少し登ると開けた広場に出ます。広場の入口に二の鳥居があり、その奥に護国神社がありました。

昭和 21 年 9 月に建てられたものだそうです。終戦の 1 年後くらいです。この護国神社の脇を入ったところに要石があります。

石柱の柵で囲まれた要石は鹿島神宮のものと似ています。

現地の説明には「香取、鹿島の大神、往古この地方尚ただよえる国であり地震が多く地中に住みつく大鯰魚（おおなまず）を抑える為地中深く石棒をさし込みその頭尾をさし通した。香取は凸形、鹿島は凹形である。

伊能穎則（ひでのり）

『あづま路は香取鹿島の二柱うごきなき世をなほまもるらし』
とあります。伊能穎則は伊能忠敬と同じ佐原の伊能家の出の江戸後期～明治始の歌人・国文学者ですが、香取神宮の宮司を勤めています。



これが要石です。鹿島よりはつきり上に出ていると思いませんか？

(2) 香取神宮-随神門

要石の場所からそのまま進めば、林の中を歩いて香取神宮本殿に出ます。途中に東日本大震災で倒れた石灯籠の上の部分がたくさん置かれていました。香取・鹿島の要石は地震を押さえつけている大石と言われていますが、東日本大震災にはさすがの神も叶わなかったのでしょうか。

鹿島神宮では大鳥居がばったり倒れてしまいました。

さて、こちらの要石も水戸光圀が掘らせてみたが掘り出せなかったとの記述がありました。鹿島ばかりでなく香取も同じ話があるようです。

ちょうど訪れた時は拝殿の修理工事中で、きっと今までも、いろいろな建造物もこのような建て直しや修理が繰り返されてきたのでしょうか。

また驚く程説明が少ないです。説明があるとすると神話か、光圀、または皇室との関係ばかり・・・。



最初の鳥居をくぐって広い参道をまっすぐ進むと、この「総門」が石段の

上に見えてきます。要石の道からは、この左手からこの場所に出る。

神宮の拝殿前には「楼門」があるため、更に外側を囲って「総門」を作ったのだろう。唐門（からもん）様式の立派な門である。

柱の数が **18** 本もあるので **18** 脚唐門とでも言うのだろう。

それにしてもこの門については書かれた説明資料が見当たらない。

まあどちらにしてもそんなに古くはなさそうだ。

総門の前には左右に阿吽の狛犬がいます。比較的新しいようです。

楼門は意図的かどうかわかりませんが、少し右にズレた位置にあります。



この総門をくぐる前に、右手に藁葺きの門がありました。

「神徳館表門」で香取市の文化財に指定されています。

江戸時代末期の建築だそうです。

神徳館では剣道の稽古場などもあるそうで、合宿や精神修養などでたくさんの人が訪れます。

総門を入ると正面にあるのが「手水舎（ちょうずしゃ）」です。

みな朱色に塗られています。

手水舎の右手に赤い楼門がそびえています。

また門につながる塀の壁も赤で、周りの緑が癒しになり、赤（朱色）が特に映えます。

2階建てのいわゆる楼門（随神門）で、8脚（3間）です。元禄13年(1700)に徳川5代将軍綱吉によって造営されたものだそうです。

門下の右側は大和朝廷初期の大臣「竹内宿弥」、左側は「藤原鎌足」の像を配しています。

門に続く塀も朱色で綺麗です。荘厳な雰囲気があります。



門の右手の塀の前に「黄門桜」という桜の木があります。

説明板によれば「貞享元年(1684)に水戸光圀が参拝の折に、植樹、奉納されたもの」とのこと。

楼門の裏側（内側）には木製の狛犬が置かれていた。